



東日本大震災被災地における
ボランティア活動報告
「絆・ベルリン」

Dr. Frank Brose

「絆・ベルリン」ボランティア活動報告

3月11日の大地震後、放射能を心配して外国人はたくさん帰国しました。ドイツ人もたくさん帰国しました。他方では別の外国人が被災者を助けたいと思っていました。ベルリンでも日本学の学生や独日協会の会員などがそう思っていました。

だからこそ、福沢先生は絆・プロジェクトを企画し、5月から会合が開かれ、同志を募っていました。最終的には、日本へ行った参加者数は16人になりました（福沢先生と13人のドイツ人、1人のイタリア人、1人のアルジェリア人）。絆の参加者は20歳の学生から72歳の年金生活者までいろいろです。

費用軽減のため募金活動もしていました。幸い、経済的に参加が難しい人々（学生など）のためにいろいろな企業と個人から寄付金を集めることができました。公益性を申請するために、法人を設立することも必要でした。ですから、7月の下旬に「Kizuna in Berlin e.V.（「絆・ベルリン」）」という協会を設立し登録しました。



写真はベルリンの大使公邸の玄関で撮りました。神余大使が8月29日に歓送会を開いてくれました。最前列、向かって左から3番目の人は福沢先生で、4番目の人は神余隆博大使で、5番目の人はメインスポンサーのデトレフ・ケーニヒ（Dr. Kade Pharma）さんです。

9月中旬に、老若男女16名の一行はベルリンから東日本大地震の被災地に行って、支援活動を行いました。今日から、私は、日本への旅行とそこでの活動について書きます。

9月13日（火）

5人はベルリンのシェーネフェルト空港で待ち合わせて、アエロフロートでモスクワを経て東京に行きました。妻と私は初めてロシアのエアラインに乗りました。アエロフロートは一番安かったです。ベルリンから東京の往復飛行は680ユーロでした。通路側の座席はゆったりしていましたが、機内食はあまりよくありませんでした。

9月14日（水）

午前10時半成田に着きました。空港のエントランス・ホールには福沢先生の友だちが4人、大船渡の世話人が2人、私立ちを出迎えにきてくれていました。

すぐ船橋に行って、福沢先生のお姉さんを訪問しました。彼女は私たちみんなに素敵なお馳走を作ってくれました。茄子や餃子、ちらし、ソーメン、豆腐などを食べました。



その後でホームステイ先に行き、ちょっと昼寝をしました。福沢先生は午後由市川市の社会福祉協議会に行き、ボランティア保険に「絆・ベルリン」で入りました。

夕方に居酒屋で最初の歓迎会が開かれました。15人でした。ビールを飲みながら、おいしいサンマの焼き魚を思う存分食べました。

日本人の絆・参加者と知り合いになれて本当にうれしかったです。今では、帰国後、彼らのほとんどと連絡をインターネットで保っています。

9月15日（木）

15日6時に起きて、7時半に集まって、私たち8人は、2台の車で高速道路で東北に向かいました。

ちなみに、2人の参加者は、私たちより2日前に、そのほかの参加者たちは、数日遅れてベルリンから日本へ来ました。東京から福島を経て遠野に8時半かかりまし

た（3回、ちょっと休憩しました。）。放射能で汚染された福島県にある地域を通ったときに、収穫できるまでに成熟した稲がたくさん見えました。



遠野まごころ寮



午後4時ぐらいに、遠野に着きました。すぐ災害ボランティア支援センターの遠野まごころの宿泊所にチェックインしました。

ここで、まごころネットという NPO 法人が今年3月の下旬からボランティア活動を組織しています。まごころネットはたくさんの寄付でまかなわれています。遠野の福祉協議会も NPO を金銭的に援助しています。

センターは本当ににぎやかでした。体育館に160名ほどの男性、隣にある和室に60名ほどの女性が泊まることができます。



160人の男性の寝所





60人の女性の寝所

10月の末までに、5万4千人のボランティアが遠野の支援センターに泊まって、ボランティア活動をしていました。

その日の午後には、センターは、活動から帰ってきたボランティアでほぼ満員でした。厳格なルールを必ず守るように言われました。一人畳一枚のスペースを与えられました。

前日に来た先行隊の二人が、私たちを出迎えてくれました。同じ日の午後5時に、もう1人の絆のドイツ人が一人で来たので、私たちは11人になりました。

日本に住んでいる絆メンバーの鶴岡さんは事前に2度も遠野に滞在し、周辺のことについて詳しくなっていました。だから、私たちはみんな、鶴岡さんの案内で、すぐ全員で近くの銭湯に車で行くことができました。この銭湯は津波で壊された廃材を燃やして湯を沸かしているそうです。

夕食後、私たちは、早く寝ました。厳格なルールによると、10時ぴったりに消灯で全館の灯りが消されてしまいます。その前に、外で、歯を磨いたり、手や顔を洗ったりしなければなりません。

床がほんとうに固かったので、浅い眠りでした。みんないろいろな服で寝ていました。

9月16日（金）

夜間に、たくさんの人々がいびきをかいていました。虫やカエルの音の伴奏で、聞きなれないシンフォニーとなって聞こえました。しかし、夜半過ぎには、寝入りました。

朝6時に『起きて下さい』の声が拡声器から流れます。まだ夜明け前ですが、すぐ220人のボランティアは起きて、服を着て、顔を洗います。7時15分から10分間ぐらい建物の前でラジオ体操をします。その後、ボランティアはグループに分かれます。



朝の体操



ボランティア区分



7時30分に、バスに乗り、前もって登録した目的地に向かいます。

海岸地域に入ると津波の跡が見えました。津波で全滅になった地域を初めて見たとき、自然の暴威に驚きました。釜石市へ行く途中で、たくさんの大きな瓦礫の山や自動車の残骸の中を通りました。



その日の仕事場は、釜石市から10キロ離れている箱崎町でした。箱崎半島にある小さな町は高さ15メートルの津波でのみ込まれてしまいました。513軒の建物の314軒が全壊しました。72人が亡くなってしまいました。42人の行方不明者もあります。

仕事場は箱崎町の下部です。目的地には家がまったくありません。コンクリートの土台だけが残っています。漁業組合のコンクリートのビルが半壊状態で港に立っています。



8時半に箱崎町に着きました。50名ほどのボランティアが2台のバスを降り、大破した中学校の前で集まりました。

ボランティアはいろいろな個人での参加者も富士通の新入社員もいました。まず、活動の隊長が活動内容について説明しました。つぎに、ボランティアが10人から20人ほどのグループに分かれて、班長の指導のもとに仕事場に行きました。ちょっと軍隊を思わせました。

作業は全壊された家の土台をきれいにするものでした。不思議なことのように思われた点は、11月には敷地の土台は撤去されるということです。何のために撤去するのだと疑問も出されたようですが、家の持ち主の望みなんだそうです。

班長の説明によれば、これがある意味での心のケアなのだそうです。それを聞いて、上記の疑問が無くなりました。不運のほこりを落とすと、持ち主の心がちょっと軽くなるのだと思います。家の守り神も落ち着くのでしょうか。



私たちはからからに乾いた泥をショベルでかき出しました。それとガラスや瀬戸物のかけらやクギなどは分別しました。分別できない物や有価物が出てくると、その都度、班長に聞きました。最後に、土台を箒で掃きました。

いつも、埃が舞い上がっていました。とても暑い日だったので、20分作業をして10分休むリズムで作業をしました。だんだん気温が30度まで上がりました。木陰はまったくありませんでした。

12時に集合場所に戻って、一時間昼休みをしました。昼休みの間に、日本人のボランティアと話しました。福井市に住んでいる夫婦も知り合いました。今でも、連絡を保っています。来年、夫婦は私たちにベルリンで会う予定です。

昼休み後、2時間半同じ作業をしました。敷地の持ち主のおばさんが午後冷たい飲み物を持ってきてくれました。



赤い旗の意味はここに住んだ人が行方不明です。



朝の集合場所に集まり、帰りのバスに乗りました。午後4時に遠野に戻って、すぐに昨日の銭湯に行きました。

銭湯から「まごころネット」に帰ると、4人の参加者（3人の女子学生と1人の男子学生）がベルリンから遠野に着きました。みんなで体育館の前で夕食を食べました。入り口近くの芝生にシートを敷いていろいろな歌を歌いながら再会を喜びました。イタリア人がイタリアの歌で、日本人が日本の民謡でそれに答えました。

残念ながら、3人の若い学生が午後10時の就眠時間を無視して、タバコを吸いながら30分以上もおしゃべりをしてしまいました。これが翌日にほかの人たちからの非難を引き起こすことになりました。

9月17日（土）

夜の3時ぐらいに地震がありました。震度4の軽震だったと思います。多くの人が起き出しましたが、起きない人もいました。天井灯が前後に揺れて、ガタガタ音を立てていましたが、地震は数秒後に終わりました。その後で、すぐまた眠りに落ちました。

拡声器から起床の合図を流す半時間も前に目が覚めて、ゆっくり体を洗うことができました。

今日の目的地は陸前高田市でした。同市は岩手県内では最大の被害を出したところ
です。陸前高田市の大部分は、津波で破壊されました。市内を通ると破壊されな
かった家は全くありません。半壊のビルが点々と立っています。

いたるところ瓦礫が山と積み上げられていました。車の残骸や冷蔵庫、家庭用品な
どが山のように積み重ねられていました。



1554人が亡くなってしまいました。また304人が行方不明です。町の80パー
セントが津波で水浸しになりました。壊れた家屋は3341戸です。

ちなみに、有名な「高田松原」も消えていました。海岸伝いに7万本の松と白い砂
浜が2キロメートルの距離にわたって続いていました。

15メートルの高さの津波の後には、「高田松原」は跡形もなくなってしまいまし
た。現在は、松は1本しかありません。そして、その最後の松も土壌塩類化の被害
を受けています。

陸前高田市を通り抜けて高田町という今日の作業現場に着きました。湾の反対街に
ある高田町は17・5メートルの高さの津波で全滅しました。



高田松原

今日は道路際の敷地の瓦礫を一カ所に集めました。ガラス、鉄もの、可燃物、石や瀬戸ものの4つに分けて積み上げました。



ここに住んでいた家族はすべてを無くしてしまいました。短時間で、家が津波で流失して、田地が荒廃して、お孫さん二人と娘さんが命を失ってしまったそうです。



しかし、遺族は希望を捨てません！敷地の隅で、83歳の女性が家庭菜園を作り始めました。庭に出来た野菜と花を見ると、私にも希望の曙光がさしこみました。



午後に敷地の孫息子さんが冷たい飲み物を持って来てくれました。彼は敷地が道路より少し高くなっているのに、津波は来ないだろうと思っていました。しかし、高い津波を見て、逃げ切ることができました。

午後4時に遠野に戻ってから、近くの温泉に行きました。満喫しました。帰りに市内の焼き肉屋で食事をしました。

9月18日（日）

午前9時に、5人の絆メンバーは佐藤正市さんと30分ほど会見しました。社会教育主事の佐藤正市さんは「まごころネット」の創始者です。



彼は私たちに会の組織と仕事のやり方を教えてくれました。現在の大問題は高い日常経費です。たとえば、毎日、多量のガソリンを買わなければいけません。

詳しい情報と説明を直接手に入れることができたので、私たちには「まごころネット」をよりよく理解できました。

1人の絆メンバーは「まごころネット」に彼女の友達からの寄付を渡しました。

午後大船渡へ転居するために、荷造りをしました。その後で、私たち皆は遠野祭りを見に行きました。素晴らしい遠野祭りは毎年10月に行われます。お祭り本部は「まごころネット」から15分ぐらい離れていました。町の中では舞台上で歴史時代の衣装をつけた市民がすばらしい剣舞などをしていました。そして、にぎやかな行列がありました。たくさんの神輿と山車を引いて回りました。

「絆」グループの男子学生が二人御神輿担ぎをしました。それは2日前に決められていました。夜にかなり雨が降ったので、とても蒸し暑い日でしたので、大変な仕事だったと思います。



午後1時半に大船渡市に住んでいる今野さんが車で迎えにきてくれました。今野さんは大船渡市の民生委員です。

親切な今野さん夫婦は私たちの到着の前々から、絆のために念入りに準備してくれました。夫婦のお世話で、大船渡の滞在はとても心地よく、そして印象深いものになりました。

「絆」グループは車3台で午後4時大船渡に到着しました。新しい宿舎は大船渡のはずれの坂の上にある「岩手県立福祉の里センター」です。



岩手県立福祉の里センター

本当に素晴らしい建物です。便利な休憩室も洗面所やお風呂もあります。快適です。共同寝室は全部満室だったので、その日の夜は、男性は会議室の床で寝て、女性は四人で和室に寝ました。

大山さんも廣瀬さんも東京から大船渡に来て、19日から私たちと一緒にボランティア活動をしました。

その日の夜に、「絆」グループは今野さん夫婦の家に招待されました。日本人とドイツ人の「絆」メンバーは美味しい手料理を食べながら、会談しました。絆の一員はイタリア歌のソロを歌って、もう一員はハーモニカの演奏をしてくれました。本当にゆったりした気持ちになりました。

9月19日（月）

6時に起きて、7時半ぐらいにバスで大船渡市のボランティアセンターにいきました。そのボランティアセンターのほうが遠野のボランティアセンターより小さめです。ラバーシューズや手袋などを借りることができます。みんなとても親切です。



少ししかバスがないので、私たちは目的地に行くバスを1時間待ちました。

今日の作業場は津波で被害を受けた「越喜来（おきらい）」です。大船渡に合併された小さな越喜来はボランティアセンターから10キロぐらい離れています。

岩手県の沿岸部では津波を防ぐための堤防の高さは10メートルぐらいです。津波の発生頻度や費用を考慮し、100年に一度の津波を想定していました。しかし東日本大震災の津波は100年に一度の津波より高かったです。たとえば、越喜来湾の堤防は11・5メートルでしたが、16・9メートルの津波が来ました。



津波の破壊力が本当に恐ろしかったです。コンクリートも粉砕されました。遺跡が山のように積み重ねてありました。



私たちは泥で詰まった下水道をきれいにしました。まずコンクリートのプレートを二人で持ち上げなければなりません。



その後で、泥をスコップで土嚢袋に詰めていきました。一人がスコップ，もう一人が袋の口を開けて待っています。半分以上入れると口を締めました。



泥中にいろいろな物がぎっしり詰まっています。たとえば、瀬戸物やガラスの破片、壊れた皿やコイン、おもちゃ、曲がってしまったスプーンなどがありました。

その後で、一杯にした土嚢袋はトラックで取り、置き場所へ持ち運んでいます。

置き場所ではその25キログラムぐらいの土嚢袋はショベル・カーで大ききで堅牢なサックに詰め替えています。

最後、築堤のために海岸線に1000キログラム以上の大きなサックを積んでいます。



午前10時から20分作業、10分休むリズムで午後2時半まで働きました。道路の反対側は京都からきたカソリック教会グループがスペイン人のリーダーのもとで作業をしていました。昼頃休止しました。ボランティアセンターを経て午後4時に「福祉の里センター」に戻りました。

その夜、私たちのグループは新しい部屋に移転することができました。我々グループだけが泊まる畳の部屋でした。

夕飯を7時に一緒に食べ始め、食べ終わった後、今日共有すべきトピックや反省点、さらに明日の予定を話し合いました。

9月20日（火）

台風第15号が目前に迫っているため、一日中雨が降っていました。

今日の午前中は、グループを2つの班に分けました。私たちの一部は大船渡高校に、残りは2軒の老人ホームに行きました。

福沢先生と私、そして2人の学生は大船渡高校の校長と話をしました。話題は授業の仕方と大地震後の現状についてでした。たくさんの学生が親を失ってしまいました。



会話の後で、私たちは、授業に立ち会うことができました。次の水曜日に高校生と交流会をする約束をしました。

2番目のグループは今野さんの奥さんの案内で2軒の老人ホームを訪れました。





10～12人の老人がその老人ホームに住んでいます。私室が小さいですが、共同スペースでリビングキッチンも社交室もあります。



津波のあとで、その老人ホームは、居住者の数が多くなっています。住居がなくなったことや親戚の死などが原因になっています。

その後で、2番目のグループは津波の被災者向け仮設住宅を見に行きました。



仮設住宅は学校の敷地や運動場、児童遊園などの高台の公有地に建てられました。応急仮設住宅に2年間無料で住むことができます。仮設住宅は小さいですが、設備は整っています。



1 番目のグループは11時からバスで大船渡市の近くにある小さい山に行きました。坂の上にある神社から、津波で破壊された大船渡の下部を見渡しました。



壊滅している町を見事な湾の眺めを背景にして見ると、惨事の全容が私の心に焼き付きました。

帰りに、だんだん雨が強くなり、ずぶ濡れになっていました。港の中心街を歩きました。被害の程度は巨大なので、深い悲しみをおぼえていました。



半壊のコンクリート建築物の間に、大きな残骸の山がいくつもそびえています。



中心街の中に大きな船が半壊の家の中にありました。

私たち皆は4時半に市役所に行き、大船渡市長と会見しました。その会見は面白くかつ有益でした。市長は英語を流暢に話すので、英語で話してもらいました。



地震及び津波の状況の説明の後、これからの復興の話になりました。一応避難所は8月一杯で閉鎖されて、全員仮設住宅に移ったそうですが、最大の問題は失業です。



鉄道の復興に対しても悲観的でした。今でもレールをどこに敷いていいか分かりません。JR は赤字路線を復興しませんから。。。



「福祉の里センター」に戻り、夕食時に 今日聞いた情報を交換して、話し合いました。

9月21日（水）

天気予報によると、台風15号が今日の午後大船渡来に来るそうです。朝から大雨なので、今日のボランティア活動は、中止になりました。

しかし、4人の女子学生は二人ずつ大船渡と釜石の幼稚園に一日保母さんとして向かいました。



10人のメンバーは昼から大船渡高校の授業参観に行きました。学生には特別の日でした。大学の教え方を知るために、大学の先生が授業をしました。

校長先生はとてもしべらるで、いつでも授業に入ってもいいとってくれました。そのため、教室の前後のドアがまったく開けっ放しになっていました。様々なテーマの講義がされました。妻と私は生物学の授業に立ち会いました。



私たちは3時に高校を出て、近くのスーパーに夕飯を買いに行きました。その時、妻の雨傘が激しい風で破れてしまいました。



夕方になると、雨風の音はだんだん大きくなりました。午後10時にとっても不思議な物を見ました。家の前にある道路では、雨水が風で道路を登るように流れていました。宿の「福祉の里」は立派なコンクリート作りなので、台風の被害は何もありません

でした。幸い台風の勢いはおとろえて、夜中には、通過しました。

9月22日（木）

台風は北海道の方向に移動しました。朝から天気は晴れになりました。二日作業を休んだので、みんな張り切って作業に入りました。

3日前の越喜来に行きました。しかし、今日の作業場所は川の反対側でした。半壊の郵便局の前に泥で詰まった下水道をきれいにしました。



郵便局は津波で水浸しになると、内部は突入した海水で破壊された。



海が天井まで流れ込み、天井板にブイなどをねじ込みました。



昼休みの後、鉄の格子板をたくさん掃除して、溝に格子板をはめていました。



その仕事に、年配の日本人のボランティアと一緒に格子板をはめる作業をしているときに、事故がありました。

隙間があったので、彼はそれを合わせるために、ドンと蹴飛ばしましたが、私の左親指がそこに挟まってしまいました。親指の先が切断されてしまいました。運悪く私は左ききです。きちんと見た上で隙間を押していれば事故は起きませんでした。

最初に、体にもものすごい痛みが走りました。その後で、血が吹き出てきました。何人かが駆けつけて、手ぬぐいなどで血が出ているところ押さえて、腕も縛り付けました。

幸運にも、私は心の平静を保つことができました。危機に臨んでは特に慎重に行動することが必要だと思っています。すぐ車で県立大船渡病院に送ってもらいました。福沢先生と鈴木さんが一緒に付き添ってきてくれました。運よく、鈴木さんは地元から参加している看護婦です。

親切な鈴木さんがいて、本当に大助かりでした。その時以来、彼女はマイミクになりました。

県立大船渡病院に駆け込みましたが、外科の先生が回診中なので、受付で長く待たされました。福沢先生は係員に緊急だと何回も指摘しました。その間に鶴岡さんが手袋に入った指先を持って来ました。

看護婦に言って冷やしてもらいました。1時間以上待ってからやっと整形外科に行くように指示されました。レントゲンを撮り、若い先生がまず診てくれました。その後もう一人の医者、小野寺先生が来て、じっくり診た後で、指の先はちぎれたので、再びくっつくのは難しいと判断しました。

外科医者は「治癒率が40%だけなので、神に祈っています。」と言いました。駄目な場合は、骨が出ているので、まず骨を削り、縫い合わせることになるが、その場合は親指が短くなるとのことでした。左利きなので、私は縫い合わせることに決めました。手術が一時間くらいかかりました。再移植の後で、金属性のキャップが二週間で指先の上に付けられました。手術後はただ神に祈るのみです。



鶴岡さんのお陰で、妻と私は「福祉の里センター」に部屋をもらいました。けがをしているので、二人部屋が便利でした。

9月23日（金）

痛くて夜は寝苦しくなりました。今日から二週間鎮痛剤も抗生物質も日に3度に飲んでいました。

朝早く鶴岡さんが車で東京に出ました。彼のおかげで私たちのプロジェクトが毎日円滑に運んでいました。絆・グループの皆は彼のご助力にとっても感謝しております。

全員越喜来に行って、昨日と同じボランティア活動をしました。私しか部屋にいませんでした。妻もボランティア活動をしました。彼女は昼休みに私の事故現場で二つの写真を撮りました。その写真を見ると私は考え込んでしまいます。



破壊された郵便局の前に破損していないポストがあります。万物は流転しているが、自然の諸力が場所によって異なっています。たとえば、流れの物陰ですから。海の波が去来するのと同じように、生き物も去来しています。

昨日、怪我をしました。鉄の格子板が事故の原因でした。今日、事故の形跡がありませんでした。その格子板が溝にぴったりはめられました。運良く、両手をさっと取り出したので、親指先しか切断しませんでした。もっと悪い怪我を免れました。

午後おそく、坂の上にある神社にお参りをしました。福沢さんと今野さん、妻、私が回復のために祈りました。その後で、神社の前にシカが私たちの道を横切りました。



9月24日 (土)

包帯を取り換えるために、午前9時に病院に行かなければなりませんでした。医者の話では、今のところ悪くはないが、数週間様子を見る必要があるとのことでした。忍耐が大切です。今日から2日目ごとに通院する必要があります。

病院に中日東京新聞の記者が取材に来て、待合室で福沢先生と私にインタビューしました。非常に熱心な記者で、一日中付き合うことになりました。

検診の後で、記者と一緒に車で大船渡の近くにある綾里町（りょうりまち）に行き、そこで作業をしている他のメンバーを訪ねました。

綾里湾にある小さな町は非常に大きな津波で壊滅しました。綾里湾の津波の高さは26.7メートルでした。港湾が打ち砕かれました。その上困ったことには、大地震が土地沈下をひき起こしました。



そばの森に立ち枯れの木が見えます。ちなみに、それは一般的問題です。津被災地では塩害を受ける木が多いです。土壤の塩濃度が高すぎるために、木がだんだん枯れていきます。



絆メンバーの作業は下水道をきれいにするものでした。秋田県から来た日本人のボランティアも一緒に働いてました。秋田市の社会福祉協議会が観光バスを一台チャーターし、大船渡に来て、一日ボランティア活動をしました。



その日、相手の仕事が本当に難しかったです。



下水道は水の滴る泥濘で詰まりました。ひざまで達する泥濘でした。





記者は作業中のメンバーを写真に撮ったり、若いメンバーにインタビューをしたりしました。その後も私に熱心に根掘り葉掘りいろいろな話を聞いてきました。同記者は以前ヨーロッパに2年間留学した経験があり、我々に親近感を感じているようです。

福島原発の事故も話題になりました。私はチェルノブイリ後のドイツの状況について報告して、現在の日本の状況とチェルノブイリ後の状況と比べました。放射能汚染について言えば、1986年当時のドイツの状況は現在の日本の状況ほどひどくありませんが、たくさんのドイツ人が今でも当時の事故をはっきり覚えていて、福島原発事故をきっかけに、ドイツでは原子エネルギー政策を変更することになりました。

外国人が日本に戻って来る条件としては、放射能汚染に関して日本政府の情報公開が外から見て信頼できるようになること、さらにフクシマの冷却装置が機能することの2つの条件が前提になるといって、彼も同感だとのことでした。

インタビューの後、綾里町の周りでドキュメンテーションのための写真を撮り、大船渡市に帰りました。



現在のところ、波戸場で堤防を築いています。たくさんの消波ブロックを積んでいます。



綾里港の近くにある記念碑は被害を免れました。

9月25日 (日)

絆・グループはトヨタのボランティアセンターのグループと一緒に綾里湾での側溝作業を続行していました。

午後2時過ぎにはほぼ全部の側溝をきれいにしてしまいました。ちなみに、今年の夏に「ベルリンの絆」がトヨタのベルリン支店から寄付金をもらいました。

今日は遠野の「まごころネット」に勤めている鈴木さんが絆・グループを綾里町に訪れました。その後、鈴木さんと私は大船渡の周辺を彼の車で一回りしました。

走行中に、私たちは「まごころネット」の組織と仕事のやり方について話し合いました。

彼は4月から今まで「遠野災害ボランティア支援センター」に勤めています。

いつもハードなスケジュールで、大変な仕事です。

実働時間は午前8時から始まり一日10～12時間ですが、給料は6時間しかありません。しかし、自分の自由意志を動機とする働きです。本当に一意専心で救援活動に当たっています。

大船渡市の隣接した「今出山」という山に登りました。道のりの大半は車で行くことができました。しかし、最後の道程は歩いて行かなければなりませんでした。



私はハイキングが大好きですが、親指のけがのために歩くと痛くて困りました。しかし、最後には、山頂からは大船渡湾が一望出来ました。本当に美しい景色が眺められました。

黒い雲が沸き上がったので、ひと休みしてから速く下山しました。その後で、海岸に通じる道をたどって、



沿岸地方とさまざまな津波防護壁を見てまわりました。



いろいろなところで、震災のため車道が通行できませんでしたので、回り道をしなければなりませんでした。

9月26日（月）

グループは二手に分かれました。

今野夫人の勤務している老人ホーム訪問組と通常のボランティア活動組でした。老人ホームに行った7人は今野さんご夫妻に2台の車でピックアップしてもらいました。

施設は数年前に建てられた建物で、とてもきれいです。6つの棟に分かれ、それぞれ8人が共同で生活しています。ホーム内では20名以上の居住者が集まっているところに案内されます。

皆さんの前でドイツの歌を歌うと、場があかるくなりました。



最後には、ベートーヴェンの「歓喜の歌」も歌いました。

時間が空いたときに、近くの県立病院に行き、包帯を交代してもらいました。その後で、また老人ホームに戻りました。昼食に招待され、一緒に食べながら歓談しました。

午後から同じ法人が経営するデイケアの施設を訪問しました。山の中腹にあり、大船渡湾を見下ろす素晴らしい景観です。



3月11日は大津波を複雑な気持ちで観察していたそうです。

ドイツの歌を歌うと、何人かが手拍子をし始めました。最後、介護の人の音頭でほぼ全員が手拍子をしました。



私は、この近隣間の相互扶助に感銘を受けました。隣人のネットワークが年寄りに手助けになっています。

午後3時に、絆・クラブの全員は大船渡市立第一中学校に行きました。



最初、講堂ではペン習字の授業に出席しました。



その後で、私たちは、コンピューター教室で授業に立ち会うことができました。



最後、ほかの教場で図画の授業を一心に眺めて、学生と話しました。



中学校の敷地では津波の被災者向け仮設住宅がたくさん建てられていました。こういう事情だから、中学校の運動場を無くしてしまった。



「福祉の里センター」に帰ると、妻と私は今野さんの家に今夜滞在するよう勧められました。

今野さん夫婦の世話で、事故後初めて、妻にお風呂で洗髪してもらうことができました。その後で親切なご夫婦に美味しい夕食を作ってもらいました。

9月27日 (火)

今日の作業場は津波で破壊された大船渡の中心部です。

大船渡市は今まで津波災害に数回会いました。たとえば、1933年に津波の最大標高は3.5メートルでした。1960年のチリ地震による津波の高さは5.5メートルで、大船渡市の被害は死者53名でした。そして、383戸の住居が流失しました。

今年の3月に、大船渡湾を襲った津波の高さは23メートルでした。海岸から3キロ内陸まで町は氾濫しました。町中心部で津波の高さは10メートル以上でした。339人が死んでしまいました。3629戸の建物が破壊されました。

過去の津波経験から、いろいろな待避所と退路がありました。ですから、津波による死者の数は以前よりも減少しました。



大船渡の下の方





東京から来た首都大学の学生のグループと先生と一緒にボランティア活動をしました。



作業は側溝の掃除でした。

5時半に立根（たっこん）公民館に行きました。日独の交流を深めるために、日本人とドイツ人が全部で40人ぐらい集まりました。首都大学東京のグループと立根町と「絆・ベルリン」の代表が挨拶をして、それぞれのグループを紹介しました。岩手日報の記者が取材に来ました。



挨拶の後、ご馳走が出されました。焼きサンマやお寿司、フライなどを食べながら、歓談しました。



ご馳走の後は、それぞれのグループが歌を披露しました。たとえば、モンゴル人の学生がモリンホールというモンゴルの弦楽器を弾き、伝統的な喉歌を歌いました。モリンホールは日本語で「馬頭琴」という意味です。喉歌は倍音を響かせた歌唱法です。聞き慣れない音楽でしたが、面白い歌でした。私たちはみんな本当に元気が出ました。



馬頭琴

絆・メンバーはドイツの民謡を歌いました。また「歓喜の歌」も歌いました。終わりに、グループ写真を撮りました。



9月28日 (水)

ボランティア活動の最後の日でした。その日も全員で同じ作業場で同じ作業をしました。



まず、コンクリートの蓋をジャッキのような工具で開けました。その後で、詰まっているヘドロやガラスや瀬戸物のかけらなどを一人がスコップでかき出し、もう一人が土嚢袋で受けました。その後でトラックで取りに来るのです。

2時半に無事に作業が終了し、2週間に亘る「絆」グループのボランティア活動が終わりました。



みんなはちょっと疲れていましたが、ボランティア活動の結果に満足していたと思います。

私にはけがのせいで不自由でしたが、それでも、最悪の条件を克服することができました。今後もまた日本に来て支援を続けたいと思っています。

高校生との交流のために、活動の後で急いで大船渡高校に駆け付けました。その日の午後に生徒総会がありました。

総会の後、「絆」の全員が250人の生徒の前に立ち、4人のメンバーが挨拶と自己紹介をしました。福沢先生も二人の日本語の学生も日本語で話しました。私はドイツ語で話して、福沢先生が訳しました。私たちは生徒の盛大な拍手で迎えられました。

その後、絆のグループは4手に分かれて、8、10人ずつまとまって、4つの教室に生徒の有志グループと交流をしました。二つのグループは英語で話して、二つのグループは日本語で話しました。



最初の話題は趣味や好きな音楽グループなどでした。その後で、将来の夢や3月11日の体験についても話し始めました。

一人の女生徒は親を失ってしまいました。今は一人暮らしをしています。ほかの生徒はいろいろな家財を失いました。また家族との絆がいかに大事だったかを認識したと何人もが言っていました。

将来の夢について、一人の男子生徒は、大地震の体験を伝達するように先生になる決心を固めました。また、一人の男子生徒は、他の人を助けられるように医者になりたいと言っていました。

9月29日 (木)

大船渡を出発する日でした。その前に一部のグループは大船渡第一中学校を訪ねました。二人のメンバーは幼稚園に行きました。

妻と私は福祉の里センターから病院に歩いて行きました。30分ぐらいかかりました。病院の待合室で看護婦が本業であるマイミクの鈴木さんと約束して会って、一緒に医者に見てもらいました。包帯を取り、傷口を見たら、少し状態が悪くなっていました。医者の見立てでは抜糸するのはまだ早いので、日曜日にまた病院に行かなければなりませんでした。

診療のまえに、鈴木さんのお兄さんが私たちを車で迎えに来てくれました。12時半に絆・グループが市内の大きなスーパーの前に集合して、3台の車で盛岡郊外の繋温泉に行きました。親切なホテルの主人が絆・グループを一泊招待してくれることになっていました。

全部で16人がその招待に応じました。6人の日本人と10人のドイツ人でした。先週東京に帰った日本人のサポーターもまた盛岡に来ました。

最初お風呂に入りました。私の怪我のために、妻と私は個別の家族風呂に入りました。

湯上がりに美味しい郷土料理を食べて、今までの緊密な協力を愉快地に祝いました。

日本人のサポーターが素晴らしい演出をしてくれました。ろうけつ染めの「絆」の手ぬぐいのおみやげ、



また合唱の楽譜準備、ハーモニカの演奏をしてくれました。





絆・メンバーの石井さん

これぞ日独の「絆」だと実感していました。日本人のメンバーのサポートがなかったら、とても2週間うまく過ごせなかったでしょう。

9月30日から10月11日

9時に私たちはみんなと一緒に朝食を取りました。妻と私は納豆を初めて食べました。その後で、みんなと別れました。



妻と私はもともと遠野の周りをハイキングする計画でした。でも、旅行コースについての予定を変更しなければなりませんでした。怪我の治療があるので、大船渡市に帰り、また3日間「福祉の里センター」に泊まりました。

10月1日に、今野さんの奥様と鈴木さんと一緒に「大船渡市にある市民文化会館リアスホール」の「岩手・生協祭り」に行きました。



市民文化会館リアスホール

大震災からの復興にむけて、地元の業者と団体のみなさんは地元のコープ主催で大きな祭りを開催しました。

15の被災された地元の企業とNPOが祭りに参加しました。その会場に1600人ぐらいが来場し、買い物や飲食などを楽しみました。



ちなみに、その次の日に2500人ぐらいが釜石の「岩手・生協祭り」に参加しました。

その後で、二人は親切にも私たちを大船渡の海岸に案内してくれました。午後中ずっと、彼女らに車で海岸に沿って行ってもらいました。本当に素晴らしい景色です！



10月2日の朝に大船渡の病院で抜糸しました。経過について、医者が詳しい診断をすることはできませんでしたが、運良くけがは炎症を起こしませんでした。その後で、今野さんは私たちを車で水沢市の新幹線駅に送ってくれました。

水沢市から宇都宮をへて日光に行って、4日間休養しました。日光では風光の美も有名なお寺も観光しました。

不運にも、福島原発事故が日光の地域にも影響を及ぼしていました。日光はとても有名なところなのに、現在はあまり観光客が来ていません。3月15日に、福島原発からちょっと放射性物質が降りました。濃度は小さいのに、たくさんの観光客が放射能汚染を心配しています。

たとえば、私たちの泊まった旅館では客は私たちだけでした。九つの部屋が開いていました。二週間前から、お客さんがありませんでした。

最後に、東京に行きました。大山さんのおかげで、病院でちょっと検診を受けることができました。そして、東京に住んでいる絆・メンバにもう一度会いました。

10月11日にベルリンへ帰りました。



Dr. Frank Brose/ Berlin

付録

ヨーロッパに住んでいる絆のメンバー

Dr. Frank Brose	地質学者	ドイツ人
Farid Cherif	ドイツ文学者、年金者	アルジェリア人
福沢 啓臣	元日本学先生 (ベルリン自由大)	日本人
Bianka Hamann	日本学学生 (ベルリン自由大)	ドイツ人
Anne-Marie Heydeck	日本学学生 (ベルリン自由大)	ドイツ人
Marcus Heydeck	指物師	ドイツ人
Brigitte Jogschies-Brose	ソーシャルワーカー	ドイツ人
Tilman Klauke	日本学学生 (ベルリン自由大)	ドイツ人
Prof. Dr. Jörg Manz	生化学教授 (ベルリン自由大)	ドイツ人
Miroslav Milov	日本学学生 (ベルリン自由大)	ベラルーシ人
Luisse Penter	日本学学生 (ベルリン自由大)	ドイツ人
Isabel Pichler	日本学学生 (ベルリン自由大)	イタリア人
Christina Pietsch	日本学学生 (ベルリン自由大)	ドイツ人
Marina Riessland	ジェットロ・ベルリン事務所の社員	ドイツ人
Prof. Dr. Claus Schnarrenberger	元生物学教授 (ベルリン自由大)	ドイツ人
Baptiste Tappe	日本学学生 (ベルリン自由大)	ドイツ人

日本に住んでいる絆のメンバー

廣瀬 芙美子	年金者	日本人
石井 清秀	アーティスト	日本人
今野 みつこ	介護・ソーシャルワーカー	日本人
今野 定志	民生委員、年金者	日本人
大山 紀子	主婦	日本人
鈴木 裕子	看護婦	日本人
鶴岡 邦夫	会社員	日本人
Sascha Klinger	宮崎県国際交流職員 (ベルリン自由大卒)	ドイツ人